



「避難所から仮設住宅へ移る前の思い出にしたい」「思いっきり声を出して子どもたちに歌ってもらいたい」「吹奏楽の練習も満足にできない娘を励ましてほしい」。

日本フィルハーモニー交響楽団は東日本大震災の被災者のそうした声に耳を傾けた。「このくらい我慢しよう」と後回しにしがちなさまざまな願いがかなえるため、被災者自身も奔走した。福島県南相馬市で林業や福祉の仕事をしてきた上藤大輔さん(54)は東京電力福島第一原発事故後、3人の子どもや妻とともに県外に逃れた。事故から約1カ月後、高校生の長男と2人で戻って来ると、知人からこんな依頼が舞い込んだ。大人数が乗れる車を持っていくなら、日本フィルを案内してあげてほしい。

# 明日への希望 奏でる

会場の小学生たちと交流する中川裕美子さん(中央)ら。山形県南相馬市の滝沢中央小学校で2023年7月20日、山田奈緒撮影



先行きが見えない中、しふと思えましたと振り返るしふ依頼を引き受け、演奏できそうな場所を探した。演奏員たちを車で避難所に連れて行った2011年6月下旬、日本フィルの音楽に初めて触れた。「この世に音楽があることを忘れていた」。喜ぶ住民の姿も目にしていた。心の底にしまい込んでいた何かが動いた気がした。「また来るね」と住民たちに言われて帰っていった演奏員たちが再び来られるよう演奏の場を進んで探したが、日本フィルの音楽と一緒にいると、きっと楽しもうと、未来があるんだと命を落とした。

## 能登でも心響かせたい



避難所のごこえる夜、住民同士数人で一枚の布団にくるまってしのいだ。原発事故による避難指示が出るのと、家族と車で仙台市の親戚宅に向かった。「窓の外は見ちゃダメ」。津波に破壊された街が見えないよう車中では祖母に布団をかけてられていたように思う。

1年後、南相馬市に戻った。だが、自宅も学校もあつた。小高区の避難指示は続いていた。市内の別の小学校に通られた仮設校舎などに通った後、15年に原一中へ進学、吹奏楽部に入った。

日本フィルは12年から原一中の吹奏楽部と交流を続けていた。松本さんから部員と演奏員たちで朝からみっちり練習した日もあった。演奏の正解は一つじゃない。楽しめばいいんだって教えてもらいました。初めて熱中できるものを見つけた。14年からは東京の杉並公会堂などで毎年秋季に開かれる秋連音楽祭に原一中の吹奏楽部が呼ばれるよう

になった。杉並を拠点に活動する日本フィルがつかないだ。23年11月、音楽祭の客席に、南相馬市から駆けつけた松本さんの姿があった。演奏前、松本さんが後輩へのエールをつづった手紙を、司会者が読み上げた。「震災は、私の人生に大きな影響を与えました。しかし、決して悪いことばかりでなく、人と人とのつながりと、あなたかさを知ることができました」。

震災から6年たった17年、日本フィルはコンサルタント会社に委託して被災地の音楽支援へのニーズ調査を行った。心のケアに加え、交流したり被災地の現状を発信したりしたいという要望の高まりが分かった。それは、演奏員の実感と一致していた。

ピアノ奏者の中川裕美子さん(40)は被災地訪問を重ねながら、気になっていたことがある。演奏会や終演後の演奏員のおしゃべりに参加するのは女性が多い。聞けば、男性はこもりがちで話しても出てこない。「被災地はもう忘れられたのかな」と嘆く人もいた。

交流や発信の場、子どもたちの夢や未来を応援できる場を作れないか。日本フィルは19年、被災地からの文化発信を応援する音楽活動を「東北の夢プロジェクト」と名付けた。各地の伝統芸能や吹奏楽部と共演し、学校に向向いて子どもたちとの交流を続けている。「命はつながるし、文化もつながる。それはとても尊いことだと感じます。中川さんはこれまで40回ほど被災地支援の演奏会に携わってきた。一生懸命練習する子どもたちに希望を感じ、自分も励まされてきたという。23年5月には、音楽を通じて子どもが幸せに育つコミュニティの活性化を目指す協定を岩手県と結んだ。宮城県や福島県で開催される街を盛り上げるイベントでも日本フィルに声がかかる。